

東京・世田谷にある国立音楽院は、音楽を一生の仕事にするための音楽学校。幼児リトミック、高齢者向けの若返りリトミックなどの福祉分野のほかピアノ調律師、楽器を修理するリペアラー、クラシックやジャズのプレイヤーなど様々な音楽の仕事を目指して、数多くの学生が学んでいます。国立音楽院で学び、夢を実現している卒業生や在校生に話を聞きました。

音楽と福祉



**大好きな音楽のパワーで
こどもに笑顔を届ける
幸せいっぱいの仕事です**

国立音楽院
リトミック本科・研究科卒業 **小暮悦子さん**

——今、どのような仕事をしていますか。

幼児リトミックの講師として、生後6カ月から4歳までの総勢40人ほどの乳幼児を本音楽院やカルチャーセンターで指導しています。リトミックとは、音やリズムに合わせて歌ったり体を動かしたりして、豊かな感受性を育むもの。ほかに、ピアノ講師として約100人の生徒を指導しています。

——なぜ国立音楽院を選んだのですか？

私は音楽大学の声楽科を卒業し、大手楽器メーカーで指導講師をしていました。でも、きちんとリトミックを学びたいという気持ちが強くなったため会社を辞めて、本音楽院へ入学しました。1年間で資格を取得し卒業するつもりでしたが、学べば学ぶほど奥が深いリトミックに夢中になり、研究科と合わせて4年間も在籍することになりました。

——幼児リトミックの指導で大切なことは？

まずは、楽しみながら音そのものに興味をもってもらうことが大切です。「あれ？何か聞こえてこない？」「ほら、何か出てくるみたい」など、言葉のかけ方も工夫します。それでも相手は乳幼児ですから、体調や機嫌次第で、予定通りに授業が進まないのは当たり前(笑)。正確性が求められていた音大時代とは正反対で、状況に合わせて柔軟に対応していくことが重要です。

それから、付き添いの保護者の方に一緒に楽しんでもらうことも大事にしています。私のレッスンがきっかけになって、自宅でも音楽を取り入れてもらえたら、こんなにうれしいことはないですから。

——国立音楽院で学んで最もよかったのは？

国立音楽院では、1年間、ベテランの先生のアシスタントとして現場を体験できるんです。この時期にびっしり書きこんだ実習ノートは、今でも悩んだ時の私のよりどころ。また、オープンシラバス制度を利用して、ジャズやピアノなど様々な角度から音楽に触れたことも、授業の幅を広げてくれている気がします。



私の経験上、音楽大学を卒業しても希望通りの仕事に就ける人はごくわずか。今、自信をもって大好きな仕事に打ち込めるのは、本音楽院で学んだおかげだと実感しています。

——音楽を仕事にしたい人にメッセージを。

ぜひ一度、私のリトミックの授業を見に来ませんか。こどもたちの満面の笑みを見れば、音楽を仕事にすることの素晴らしさがきっと伝わるはず。未来の同僚とお会いできるのを楽しみにしています。(談)



**音楽療法士として
若返りリトミックを指導。
今の私の生きがいです**

国立音楽院
音楽療法学科2年 **濱田幸子さん**



——なぜ音楽療法士を目指したのですか？

私は34年間、小学校の教員をしていました。あるとき偶然、テレビで音楽療法士の活動を目にして強くひかれました。そこで教職を5年早く辞し、好きだった音楽の仕事にチャレンジしてみることにしたんです。

国立音楽院では、音楽の基礎から若返りリトミックの指導法までしっかりと学んでいます。入学前は、若い人たちに溶け込めるか心配していましたが全く問題なし(笑)。年齢も経歴も様々な友人がたくさんできました。

——「若返りリトミック」とは？

歌や楽器の演奏、体操などを取り入れた高齢者のための音楽療法のことです。病院や老人ホーム、カルチャーセンターなどで行われていて、介護予防に有用な手段としても注目されています。

——すでに現場にも出ているそうですね。

音楽療法学科で学びながら、週に1、2回ほど老人ホームなどを訪れて、若返りリトミックを実施しています。「夏は来ぬ」「青い山脈」など年代に合わせた歌謡曲を選び、時にはイントロクイズを取り入れたりして、興味をもっていただく工夫もしています。相手の反応を見ながら、時にはハプニングも笑いに変えつつ。その場でプログラムを組み立てていくすべは教員時代に身につけていますから、その点は大丈夫ですね。

特に役立っている授業は、生徒が指導者役や高齢者役になって参加するロールプレイング。頭の中でどんなに考えたつもりでも、その立場になって初めて気付くことはたくさんありますからね。

——やりがいを感じる時は？

高齢者の方々に「来てくれるのが楽しみ」「今度も絶対参加します」などと喜んでいただけるのは、本当にうれしいですね。それから、認知症の方が笑顔になったり、音に敏感に反応してくれたりするようになった時、音楽の力を実感しますし、大きなやりがいを感じます。

音楽療法士としての第二のキャリアは、私の生きがいです。チャレンジ精神をもってこの世界に飛び込んでみて本当によかった。今後は、若返りリトミックを取り入れる施設がもっと増えるように頑張っていきたいですね。(談)



好きな音楽を
一生の仕事に

Pick up!



国立音楽院
ドラムカスタマイザー科卒業
中村勇輝さん

福祉分野以外にも音楽の仕事は様々。プレイヤーとして活躍する卒業生にインタビュー。

ドラマーの夢に再挑戦して本当によかった

——具体的な仕事内容を教えてください。

ジャズドラマーとして、レストランやホテルなどで演奏するほか、ジャズドラムスクールの講師もしています。

——国立音楽院に入学したきっかけは？

高校時代に吹奏楽部で大太鼓を担当していました。その後ドラマーを志したのですが、さすがにプロは難しいだろうと。それでも音楽に携わっていたくて、ドラムカスタマイザー科に入学を決めました。

——プレイヤーに転向したのは？

入学してまもなくです(笑)。演奏したい気持ちが抑えられず、自由に科目を履修できるオープンシラバス制度をフル活用して、ドラムの個人レッスンをたくさん受けました。ただ、ドラムカスタマイザー科で楽器の選び方やチューニング、メンテナンスの仕方などを学べたことは、今、プレイヤーとしても指導者としても大いにプラスになっています。

——国立音楽院で学んで最もよかったのは？

僕はあえて、エレクトーンやベースなど、ドラム以外の先生にも指導してもらったんです。他楽器からの視点に触れたこの経験は、今、バンドで演奏する際に大変役立っています。また、ドラムだけでも6人の先生につきました。相手がどんな音楽を求めているかを理解し応えていくことは、プロとして音楽に携わるための最高の訓練になりました。(談)

